

図書館通信

第 15 号 8 月 1 8 日 (月)
名古屋経済大学
高蔵高等学校・中学校 発行

夏休み中の図書館活動を紹介します！



今年度の『図書館報』の特集テーマは、「戦後 80 年」です。7 月 30 日 (水)、その記事づくりのため、3 名の図書委員と一緒に、「**愛知・名古屋 戦争に関する資料館**」を見学してきました。

資料館では、空襲の被害、軍隊での生活、学童疎開、シベリア抑留などに関する展示を見ながら、職員の方の説明を聴きました。生徒たちはメモを熱心に取りっていました。職員の方が次のように話されていたのが、印象的でした。「できごとを知ったり、実物を見たりすることも大切ですが、「なぜそうなったのか」という点も合わせて考えられると、戦争についてより深く学べると思います。」

資料館の見学後、生徒の一人が、「名古屋での模擬原爆の投下実験、過酷なシベリア抑留生活の実態など、初めて知ることばかりで、衝撃的でした」という感想を話していました。1 時間ほどの滞在でしたが、有意義な時間でした。機会があれば、皆さんもぜひ、「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」を訪れてみてください。

さて、これまでの「図書館通信」で、博物館の企画展をいくつか紹介してきました。個人的に見学した展示がありますので、その様子を下記の「高蔵図書館インスタグラム」にアップしています。そちらも、ぜひご覧ください。

右の写真は、**名古屋市科学館**で開催中の特別展「**古代 DNA—日本人のきた道—**」〔～9 月 23 日 (火・祝)〕で展示されている旧石器時代の化石人骨です。こうした古代人骨のゲノム解析を通じて、私たちの祖先はどこからやってきたのか、縄文人や弥生人の DNA がどのように、私たちに受け継がれているのか、古代人の家族関係はどうなっていたのかなど、新しい知見が次々にもたらされているようです。知的関心をかき立てられる特別展で、とてもおもしろかったです。



高蔵図書館インスタグラムはこちら⇒

TAKAKURA LIBRARY

夏休み、読書をしていますか？

何かと忙しい毎日。学期中だと、読書をゆっくり行う余裕がないかもしれません。しかし、この夏休み、比較的まとまった時間を取りやすいのではないのでしょうか。そうした時間を読書に充ててみては、いかがでしょうか。かくいう私も「一冊でも多くの本を」という思いで、読書に勤しんでいますーそれが実になっているかどうかは別として。

この夏休み中の読書で「おもしろい」と感じた本を紹介します。勅使河原真衣『働くということ 「能力主義」を超えて』（集英社新書、2024年）です。本書は「新書大賞2025」の第5位にランクインした作品で、一挙に読み終えることができました。現代社会の生きづらさをつくりだしている主たる要因の「能力主義」ー「際限なく高みを目指すよう、縦方向に「能力」獲得」を促す言説や価値観ーに振り回されることなく、「組織開発」に基づいた新しい働き方のエッセンスを紹介している本です。

本書の特徴は、私たちが何も疑わずに受け入れているであろう「能力主義」を徹底的に批判していることです。皆さんもよく、「社会に必要な能力を身につけよう」と言われているかもしれません。当たり前のことかもしれませんが、筆者はあえて問います。「社会に必要な能力とは、そもそも何か？」、「どのような状態になったら、その能力を身につけたと言えるのか？」、と。「コミュニケーション能力」、「コンピュータスキル」、「言語スキル」などは、比較的まだ想像のつきやすい「能力」かもしれません。しかし、「問題発見力」、「的確な予測」、「リーダーシップ」、「責任感」のような「能力」になってくると、分かったようで、つかみどころのないものばかりです。そして、例えば、「リーダーシップを身につけている」状態を、どのような指標で客観的に測定できるのかといった点になると、さらに不明瞭となります。ちなみに、経済産業省は「未来人材ビジョン」という資料の中で、56項目にわたる「意識・行動面を含めた仕事に必要な能力等」を列挙しています。これら全てを兼ね備えるスーパーマンに、私たちはなれるのでしょうか。つまり、「能力主義」とは、人が創り出した幻影にすぎなく、そんな言説・価値観を受け入れるほど、私たちは「生きることに疲れた」となってしまうのです。だから、筆者はこう述べます。**「たった一人で達成するものの小ささたるや。どんな状態であれ、とりあえず前を向いて、なんとか進んでいる。これが仕事の原型、もっと言えば、人生の全貌です。「有能」になることや、「自立」すること、人と「競争」することのために、生きているわけではありません。人と人が組み合わせあって、助け合うことが生きることなのです。」**

このような人間観に立った上で、どうしたら、「能力主義」から脱却することができるのか。「組織開発」という観点に基づいて、さまざまな職場の働き方を変えてきた経験から、次の二点を主張しています。**「一つは、「誰が／どっちが／何が「正しい」のか」という、「一元的な正しさ」を追い求める議論をやめること。もう一つは、「それぞれの人が持つ興味、守備範囲を持ち寄って、総じて幅広な見方を確保すること」、です。**これらについては、具体的な事例が本書で紹介されているので、そちらをご覧ください。

本書の最後に、筆者の思いが一番詰まった言葉が記されています。**「他者よりも「抜きんでる」のではなく、いつもそばに、頭の片隅に、画面の奥に・・・どんな形でもいい、他者と「ともに在る」こと。これこそが労働であり、教育であり、社会で生きることだ。汝あっての我。他者に心からの感謝と敬意を。」**本書を読み通すと、この言葉が心に染みてきます。

合わせて、『「能力」の生きづらさをほぐす』（どく社、2023年）や『学歴社会は誰のため』（PHP新書、2025年）もおすすめです！

